

# 共に未来を創る仲間に出会える旅

第21回 「世界青年の船」 事業

神戸大学発達科学部

関本 彩子



## 事業で得たことは何ですか？

私は、海外青年に日本の文化を知ってもらいたいと思い、事業をきっかけに日舞や茶道といった芸事を学びました。他の日本青年たちと協力しワークショップなども行いましたが、もともと嗜んでいたピアノや声楽といった音楽を通じて、フェアウェルパーティーで、トンガやベネズエラといった海外青年たちと一緒に舞台上で曲を演奏するという企画を作り上げたことが、国境を越えて人と人は解りあえることができるという確信に

繋がりました。もっと海外のことを知り、日本を紹介し、お互いに解りあえるようになりたいと思う気持ちが高まり、海外で生活をするという夢や英語を流暢に話せるようになりたいという夢を実現するモチベーションを事業を通じて得ることが出来たと思います。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

事業前の私は人の目を気にして、自分のやりたいことをうまく表現できませんでした。

私は公立中学校で講師として働いていましたが、海外に行って自分を高めたいという思いや、もっと生徒たちが笑顔になれるような教育をしたい。そう思って、欧州に行くことを決意しました。

国籍を問わず、共に船での時間を過ごした仲間とインターネットを通じて話をし、自分のやりたいことを持ち、その気持ちを貫いた

めの勇気を与えてもらいました。事業での経験や、欧州での経験を元に、様々なバックグラウンドの人々が理解し合うために、芸術の力が役に立つのではないかと思います。私は、社会人学生として、再び大学の門戸を叩きました。

## 《主な略歴》

2010年

兵庫県西宮市出身  
浪人時代まで、西宮市で過ごし、大学、大学院は北海道大学文学部・文学研究科歴史文化論講座で学んだ。

修了後、内閣府の第21回世界青年の船事業に参加し、その後は、西宮市内の公立中学校で、社会科・英語科の非常勤講師・臨時講師をし。アイルランドでワーキングホリディを過ごす。

現在、神戸大学発達科学部人間表現学科1年生。兵庫県青年国際交流機構会長。

## これからやりたいことは何ですか？

音楽といった芸術の力を使って、多くの人が笑顔になれる社会を作ることです。事業を通じて得た、グローバルなネットワークを使って、社会人学生として、周りの若い学生たちを鼓舞したり、大学と協力して、国際理解を深めるようなプログラムを作っていきたいと考えています。



# 船で出会った仲間と広がった世界観 今でも続く海と国境を越えた友情

第23回世界青年の船・第12回青年社会活動コアリーダー育成事業

四條畷学園大学 講師

宮嶋 愛弓



## 《主な略歴》

- 2003年 大阪府枚方市出身
- 2007年 作業療法士国家資格取得  
JICA青年海外協力隊に参加  
ベトナムホーチミン市障害  
児整形外科リハビリテー  
ションセンターにて活動
- 2010年 ベトナム難民在住地域にて  
地域・訪問リハビリに従事
- 2011年 内閣府の世界青年の船事業  
に参加  
大阪国際交流財団コミュニ  
ティ通訳業務を行う  
東大阪市外国籍住民施策懇  
話会委員に従事  
大阪府立大学大学院博士前  
期課程に進学
- 2013年 大阪府立大学大学院修士号  
取得  
博士後期課程に進学  
内閣府の青年社会活動コア  
リーダー育成事業に参加
- 2014年 四條畷学園大学リハビリ  
テーション学部作業療法学  
専攻講師として勤務

## 事業で得たことは何ですか？

世界青年の船事業に参加して、国籍・年齢・文化背景など様々な多様性をもつ仲間と出会い、日本全国・世界各国に家族が来ました。船という限られた空間で、濃い時間を共に過ごしたからこそ、生まれた関係だと思います。船上で睡眠時間も惜しんで語り築いた友情は今も続いている、下船後に国境を越え中東オマーン・アラブ首長国連邦で同窓会も出来ました。

その後はさらに世界観が広がり、自分の専門である障害者関連領域において青年社会活動コアリーダー育成事業に参加することを決意しました。日本に先駆け国連障害者権利条約に批准したニュージーランドにおける法律や制度を学び、社会モデルに基づいた共生社会の在り方から学び、その経験を日本の現場で活かしています。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

内閣府事業の経験から、世界をより身近に感じるようになり、世界で起きる災害や紛争に対し、自分が出来る何かを、より具体的に考えるようになりました。事業で得た人脈を活かせば可能性はより広がると感じています。

また、「障害のある空間があるだけ」という考え方や、当事者の声を聞く姿勢を大切にしながら本人の夢や目標に向かって自己選択・自己決定を可能にする仕組みを学んだ経験から、外国籍の方や障害のある方々の生活や人生を支援する私の考えに強く影響しています。現在は作業療法士という専門職を育成する講師として多くの人に経験を伝え、共有しています。どの事業においても、参加後の活動にどう活かせるかが大切だと思います。



まず興味と関心を持ち自ら一歩動くこと、そして、感謝の気持ちと謙虚さを忘れずに、楽しみながら続けること、これらは事業を通して学んだことであり、今も私の生き方のベースになっています。

## これからやりたいことは何ですか？

事業に参加してから、忙しい中でも自分の住む地域で活動を続けていると、また新しい出会いがあります。そういった人とのつながりが私の生活をより刺激的なものにしてくれています。私はこれからも自分の住む地域で作業療法士としての活動を続けながら、大学院での研究を続け、自己研鑽に励みたいと思います。

共生社会の一員として、日本に住む外国籍の方々や障害のある方々の、生活を支援するだけでなく、国籍の違いや障害の有無に関係なく同じ人として関われる人材を育てたいです。

将来は作業療法士の専門職がまだないベトナムに戻り、作業療法士を育て、障害のある子ども達が充実した毎日を過ごせるよう一人でも多くの笑顔が増えるような活動を続けていきたいです。

# 「自分らしく生きる」を発見

第13回 「世界青年の船」事業 (SWY13)

茨木市

×

後藤聡子

## 事業で得たことは何ですか？



世界16カ国の青年と寝食を共にし、50日間、時間を忘れて語り合った。海外青年の自分で考え生きていく姿勢に感動し、自分と違う考えや背景を持つ人への寛容さに驚かされた。日本での恵まれた生活や、他の人と同じように考え行動することが当たり前だった私には、大きな衝撃だった。

船上活動では、イベントを多く企画運営したが、その中でも海外青年は参加を心から楽しみ、盛り上げてくれた。日本人が、日本

で同じことをしたら、“はしたない”と言われてそうなのはやぎ方ではあるが、自分の気持ちに素直に生き、表現する彼らは、私にとってまぶしい存在だった。

他の人と同じようにしないといけないという事ではなく、自分の行動に責任を持てるなら、気持ちを素直に表出してもいいのだということに気付かされた。事業に参加した事で、大学4年生の秋、就職を目前にした私は、自分にしかできないことを追求し、自分の気持ちに素直に生きてみようと思えるようになった。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

卒業時、自らの経験を生かして、障害者支援の仕事をしよと決めた。卒業後3年間、日本で仕事をした後、米国で、支援学校の教員の仕事に就いたが、世界中にSWYの仲間がいたことで、思い切って飛び出すことができたように思う。3年間の海外経験後、日本に戻り、障害者のより良い生活を支援するために、大学に入り直して作業療法士となる道を選んだ。

人からすれば、驚くような生き方かもしれない。だが、私自身はSWYを経験し、OB・OGの方たちとの交流の中で、自分に自信を持って自分の足で立ち、歩んでいける人生を選び取ることができるようになったと思う。

現在はボランティア活動として、SWY13の仲間と共に、IYEOのチャレンジファンドを利用して、被災地支援をしている。福島の商品の



販売と、福島とスペインの交流が中心の、「南三陸の玉手箱」。自分たちにできることを考え、取り組むというSWYで学んだ経験を生かして、今後も様々な支援を続けていきたいと考えている。

## 《主な略歴》

- 2000年 大阪府箕面市出身  
内閣府の第13回世界青年の船事業に参加
- 2001年 無認可作業所での勤務後、小学校で障害児介助員をしながら、通信制大学で社会福祉を学ぶ
- 2003年 米国の自閉症専門の支援学校にて寮職員として勤務
- 2006年 名古屋大学医学部保健学科に編入し、作業療法学を専攻
- 2009年 作業療法士国家試験合格  
重症心身障害者施設にて作業療法士として勤務
- 2012年 茨木市に入職  
障害福祉課ケースワーカーとして、地域の障害者の相談や支援にあたる

## これからやりたいことは何ですか？

「障害を持つ人とその家族にとって、暮らしやすい社会を築いて行くためにはどうしたらいいか」ということが、障害支援をしよと決めた時から、私の人生を通じた宿題である。現在はまだ模索段階ではあるが、障害を持つ人も、社会の中で生き生きと生活していけるような日本にしていきたいと思っている。

IYEOのメンバーには、様々な分野で活躍している方々が多くいるため、ネットワークを生かして、また新たな活動が展開できればと考えている。'Think globally, Act locally' IYEOのメンバーだからこそその発想と行動力で、活動を行ってほしいと考えている。

# グローバルもローカルも同じ！ ～LOCAL! same as GLOBAL～

第16回 「世界青年の船」 事業

北海道職員（大樹町役場） ×

荒木 祐亮



## 《主な略歴》

- 千葉県栄町出身
- 1999年 筑波大学で都市計画・地域づくりを学ぶ
- 2003年 筑波大学大学院で経営を学ぶ
- 2004年 内閣府の世界青年の船事業に参加
- 2006年 IT系ベンチャー企業に勤務
- 2011年 北海道に移住、北海道庁に転職
- 2013年 大樹町役場（十勝地方）に派遣

## 事業で得たことは何ですか？

船上では、なるべく多くの国の人とコミュニケーションを取ろうと心がけ、音楽サークルに所属して活動した他、各種イベントにも積極的し、1日3回の食事の時は、できるだけまだ話をしていない人と会話をするよう努力しました。

すると、歌・踊り・スポーツ・食事などは、万国共通のコミュニケーションの手段（究極は笑顔！）であり、どの国にも根付いたものがある（グローバル）ということに気付きました。また、乗船当時学生で、地域づくりを学びながら、日本各地の農山村を巡っていた私は、地域（ローカル）でも同じような文化・

風習があることにリンクしたのです。

もう1つはリーダーシップの在り方です。各国には、多くは語らないが存在感があるタイプ、自らメンバーと一緒に現場に入り込むタイプ、できるだけ後ろからバックアップに徹するタイプなど多種多様なリーダーがいました。約2か月近い研修期間中には、心身ともに疲れてくるメンバーが出てきたり、大小様々なトラブルが発生することもありましたが、そんな非常時における各国リーダーの対応は、とても勉強になりました。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

乗船前は、「地域づくり」の道を志ながらも、一方で海外にも興味はあり、自分が将来、どういう地域（スケール）でやりたいのか迷いがありました。しかし、事業に参加したことで、自分なりに「グローバル（海外）」でも「ローカル（日本の地方）」でも、現場で起きている根本的な問題の解決方法一つつまり違う立場の者同士でも互いに尊重し理解し合えるようなコミュニティを築くこと—は同じであると思うようになったのです。それならば、まずは自分の生まれた日本でしっかり根を張ってやっていこうという気持ちになったのです。

大学卒業後は、短期間にビジネス経験を積むために、最初はIT系ベンチャー企業に就職しましたが、その後、北海道に移住し、



ようやく地域づくりの仕事に携われるようになりました。今は、人口6千人弱の町にて、地元の企業や飲食店、役場関係者らと、仕事の領域を超え、地域の食材を使ったご当地グルメの開発等に取り組んでいます。

## これからやりたいことは何ですか？

今後、地域が生き残るためには、地域の独自性や中央に依存しない独立性が求められており、政治・経済・教育・文化・スポーツなどあらゆる側面で、日本の地域と海外の地域が直接繋がる必要性や場面が増えてくると感じております。既にインターネットの普及により、個人レベル

ではそのような繋がりは爆発的に広がっています。

将来は、事業に参加して学んだコミュニケーションやリーダーシップを活かし、ローカルとグローバルを繋ぐ架け橋となるようなことができれば、面白いなと思っております。